

丹後機業の動き

市場の縮小で小さな商い 糸価の上昇で採算悪化 見直される生産体制

- 日銀が12月14日に発表した企業短期経済観測調査（短観）は、企業の景況感を示す業況判断指数（DI）が大企業製造業で前回9月調査から9ポイント下落のマイナス12となり、2ヶ月連続で悪化した。2010年3月調査でマイナス14を記録して以来、2年9ヶ月振りの低水準。沖縄県尖閣諸島をめぐる対中国関係が冷え込み、輸出や生産が低迷したのが主要因。京滋企業のDI値も9月から3ポイント下落のマイナス16となり2期ぶりに悪化した。消費マインドの冷え込みで非鉄製造業が悪化しており、同支店では「足踏み状態が弱含みに向かいつつある」としている。
- 生糸価格がジリジリと値上がりしている。為替は円安傾向にあり一層値上がりに拍車がかかっている。小売店の倒産が増加する中でますます物が動かない状況であり、採算は一層悪化している。
- 市場の縮小の中で生産体制など現状の見直しが行われている。出機の廃業は火を見るより明らかである。そこで、企画力や資金力のあるところが、技術力のある一貫生産の機業と手を結び、自分が値を決めて売る損をしない企業連携が模索されている。
- ちりめんも同様であるが、多くの繊維製品が中国から東南アジアへの生産シフトが進んでいる。ここに来て東南アジアでも人件費が急速に上がっている。コストを追っただけの生産移転は難しくなりつつある。
- 来年の3月で中小企業金融円滑化法（返済猶予法）が期限切れを迎える。現状からして先が心配になる。2～3年延ばして景気対策がほしいとの声や延命策は不要との声が聞かれた。

（調査時期：平成24年11月下旬～12月上旬）

（調査機関：（財）京都産業21北部支援センター）

【ちりめん（白生地）】

●平成24年1月～11月の生産量は、41.1万反で前年比94.3%（無地7.1万反・同77.1%、紋33.7万反・同99.1%）となった。無地はほぼ一年を通じて低調の状況にあるが、紋は6月以降前年を上回る月もあり増産の傾向にある。

●財務省の貿易統計によると、平成24年10月現在の小幅白生地輸入量（無地及び紋）は、31.4万反で前年比107.9%と増加している。主にベトナムからの輸入量は無地・紋共に増加の傾向にある。

●中国の生糸価格は、暴騰した昨年より春先よりは安いものの、ジリジリと上がっている。その状況を集散地にはわかってもらえず、白生地の価格に対して糸は別の所にいるような状態で連動しない。採算は一層悪化し産地は厳しい状態となっている。

●海外の糸価の高騰は、利益率の高い作物への転換など、養蚕農家の減少と高齢化、天候不順による不作など良質繭の減少。製糸工場では、給料の高い職種への転職による労働者不足から生産性が低下、さらに中国国内の絹布団など内需の好調が要因と言われている。

●この一年これと言ったヒット商品はないが、室町とは多品種小ロットの商いに、十日町とは数は少ないがグレードの高いものをコンスタントに流していく商いとなっている。ものを作らないと商いは小さくなる。待ちの商売から、先との連携で仕掛ける商売が必要としている。

また、親機は今日まで賃機の後継者が育たない環境を作ってきた。織工賃は昭和50年頃の半分である。この収入では後継者は育たない。コストを追っての海外生産が続いている。海外での生産は、利益と資産、人材と技術の海外移転であり雇用と納税も海外に移っている。取り返しのつかない大きな付けを残しているとの声が聞かれた。

【帯地】

●平成24年（1～9月）の西陣帯地推定出荷数量は、47.9万本で前年比90.7%と減少している。主力の袋帯は90.6%の減少であるが、主に洒落物用として多いなごや帯は77.3%と大きく落ち込んでいる。この秋の催事は、入り込み客が少なく売り上げは少なかったようだ。

●丹後での生産の60%程度が、ガチャ織りで二人で3台持ちの価格の安いものである。現在は経待ちや緯待ちは少なく、春頃より機はよく動いている。工賃収入も良くなっているようだ。

中級品の製織は30%程度で、1台持ちで工賃が良いが一柄の製織は1～3本程度と稼働率は悪い。売れる物だけ織っていく状況である。また、本袋、唐織や多色で切り替えの多い上物は、技術のある機場の確保が難しくなっている。上物が製織できる機場がなくなると、その企画が終わってしまう状況にある。

●機台数の減少は賃機の稼働にも影響しており、織って出るところには仕事が回ってくる。しかし、越単価は安いままで改善されていない。この後継者の確保には工賃収入の改善が必要であるが、まずは

織り工賃の支払い方法を、西陣から直接代行店や賃機に支払われることを求めている。西陣からは、機拵え・経継ぎ・紋替え・糸繰り等の工賃も出ているはずだ。本来賃機が受け取るべきものが代行店に入っているようだ。これが改善されるだけでも賃機の収入は20～30%は改善されるとの声が聞かれた。

【広幅織物】

●服地では、正絹はロットが小さくスポット的である。加えて生糸価格が上昇する中で、ポリエステルなど他の素材との交織により価格を下げている。

ポリちり関係では、二越のポリちりは見飽きた状況の中で、前年対比で60～70%程度まで減少しているが、目先を変えたシャーリングやオパール加工、突切りなど変化のあるものは売れている。しかし、全体的には安い海外物にシフトしており国内の生地は動きが悪い。

また、新合織等の多くの原糸も海外生産であり、大量の購入を求められるなど素材開発ができていく状況にある。

●ネクタイ生産は輸入品も含めて、2,500万本～3,000万本であるが、年々減少を続けている。6ヶ月間のクールビズ、ネクタイを締めないスタイルの定着など不安材料が大きい。

ネクタイは季節商品化している。11月からは春物が生産されており、年内はフル稼働の状況だが短納期で単価は厳しい。そのため、服地等新しい用途への素材開発を行い、丹後マルシェなど展示会にも出展して情報収集を行っている。

●カーシートは、9月中旬のエコカー補助金が終わって生産が停止状態に近い。在庫が多いため年内は生産調整が行われている。また、試織品が多く稼働率が悪い。最近の企画は、用途の多様化でコストダウンを図るため染めが多い。しかし、染色後欠点が発生することもあり機屋としてはリスク負担が大きい。さらに広幅化が求められているが、先の見えない状況の中で、製織品の変更や廃業が検討されている。

【小物】

●正絹の風呂敷は68cm幅が中心であるが、売値を下げるために、目方が900匁から700匁に変わっている。日本経済の悪化で良いものが買えない状況にあるようだ。

300#のレーヨンちりめんは、京都や岐阜の精練工場の廃業等により、徐々に丹後での加工量が多くなっているが生産量は昨年並みである。

●衿地は、機業の廃業もあり減少している。耳のある衿地は少なく、ヒートカットの安いものが増えている。こうした中でポリエステルや異収縮昆織糸を使用したものは、主に刺繍の加工下として使用されているが、肌触りがよく市場では目新しく見られている。

●帯揚げも着尺と同様に織機台数の減少の中で生産も縮小している。しかし、振袖の市況が悪い中、NC関係ではまだまだ中国の安い物が使われている。

●バックなど資材や雑貨関係のレーヨンちりめんは比較的安定した生産が続いている。